【中国史編】

①渭水盆地を本拠とする周は，そのうちの有力な邑の一つであったが，次第に勢力を増し，前 11 世紀に殷を滅ぼした。

下線部について，孟子がとなえた王朝交替の理論の名称を答えなさい。また，その理論の内容を，以下の 4 つの語句すべてを用いて 70 字以内で説明しなさい。使用した語句には下線を引くこと。

〔語句〕

天子　　天命　　禅譲　　放伐

易姓革命説

内容…天命が革り(あらたまり)，新たな有徳者が天子になり姓が変わる[易わる]という王朝交替理論で，武力によるものを放伐，前君主からの譲位によるものを禅譲という。

②春秋・戦国時代には政治・経済・社会が急速に変化し，春秋時代中期以降には農業技術の革新が起こった。この農業技術の革新とそれ以前の農業技術との相違について述べ，その革新が農業経営のあり方と，従来の周の社会秩序のあり方に及ぼした影響について，90 字以内で説明しなさい。

2018 首都大学東京

人力と木製農具にかわり牛耕農法と鉄製農具が普及し，より速く，深く耕すことが可能となり農業生産力が上昇した。この結果，家族単位の農業経営が可能となる一方で，氏族の統制が緩んでいった。

春秋・戦国時代の中国において鉄器の出現がもたらした経済的・社会的変化を300字以内で述べよ。

鉄製農具と牛耕法の普及は，諸侯の治水灌漑や開墾の奨励と共に飛躍的な農業生産力の向上をもたらした。その結果，従来の氏族共同体に代わって小家族が農業生産の中心となり，土地の私有化が進んで大土地所有者の出現を促した。また農業生産力の向上と共に商工業も発達し，青銅貨幣が流通して富裕な商人層が出現した。こうした状況下に諸侯は富国強兵を目指して郡県制を施行し，中央集権化を進展させて強大となった。また，新しい価値観を説く諸子百家が活躍した。このように鉄製農具の出現により，封建体制下の世襲的身分や氏族的な統制が緩んで封建制が崩壊し，個人の能力を重んずる実力本位の傾向が顕著となり，実力万能の時代となった。（297 字）

① 渭水盆地を本拠とする周は，そのうちの有力な邑の一つであったが，次第に勢力を増し，前 11 世紀に殷を滅ぼした。

下線部について，孟子がとなえた王朝交替の理論の名称を答えなさい。また，その理論の内容を，以下の 4 つの語句すべてを用いて 70 字以内で説明しなさい。使用した語句には下線を引くこと。

〔語句〕

天子　　天命　　禅譲　　放伐

「易姓革命説

内容…天命が革り(あらたまり)，新たな有徳者が天子になり姓が変わる[易わる]という王朝交替理論で，武力によるものを放伐，前君主からの譲位によるものを禅譲という。」

② 春秋・戦国時代には政治・経済・社会が急速に変化し，春秋時代中期以降には農業技術の革新が起こった。この農業技術の革新とそれ以前の農業技術との相違について述べ，その革新が農業経営のあり方と，従来の周の社会秩序のあり方に及ぼした影響について，90 字以内で説明しなさい。

「人力と木製農具にかわり牛耕農法と鉄製農具が普及し，より速く，深く耕すことが可能となり農業生産力が上昇した。この結果，家族単位の農業経営が可能となる一方で，氏族の統制が緩んでいった。」

〇春秋・戦国時代の中国において鉄器の出現がもたらした経済的・社会的変化を300字以内で述べよ。

「鉄製農具と牛耕法の普及は，諸侯の治水灌漑や開墾の奨励と共に飛躍的な農業生産力の向上をもたらした。その結果，従来の氏族共同体に代わって小家族が農業生産の中心となり，土地の私有化が進んで大土地所有者の出現を促した。また農業生産力の向上と共に商工業も発達し，青銅貨幣が流通して富裕な商人層が出現した。こうした状況下に諸侯は富国強兵を目指して郡県制を施行し，中央集権化を進展させて強大となった。また，新しい価値観を説く諸子百家が活躍した。このように鉄製農具の出現により，封建体制下の世襲的身分や氏族的な統制が緩んで封建制が崩壊し，個人の能力を重んずる実力本位の傾向が顕著となり，実力万能の時代となった。」(297 字)

中華帝国には，それを支えた一連の「仕組み」があった。そのうちいくつかは，秦漢時代に採用されたり創始され，20 世紀初頭に清朝が滅亡するまで存続した。そのような仕組みについて，中央が地方を支配する制度，対外関係の原則，正統とされた思想，歴史書の形式の 4 つの側面から説明しなさい。なお秦漢時代の間に変化があった場合にはそれにもふれること。また解答には以下の用語を必ず使用しなさい(250 字程度)。

封建制，　郡県制，　委(倭)奴国王，　儒家，　司馬遷，

大阪大

秦は地方支配に周の封建制にかわり中央集権的な郡県制を採用した。前漢成立当初は封建制と郡県制を併用する郡国制であったが，呉楚七国の乱以降は実質上郡県制になった。周辺諸国の首長と形式的な君臣関係を結んで，皇帝を頂点とする秩序の中に組み込む冊封体制が漢代に形成された。後漢の光武帝と日本の委奴国王がその例である。思想面では，秦は法家を採用して儒家を弾圧したが，前漢武帝の頃から儒学が官学化し，その後正統な学問となった。司馬遷が皇帝の事績と功臣の伝記を中心とする紀伝体で『史記』を著し，正史の形式となった。

名古屋大学

ある特定の地域の歴史を通観する時，大きく時代が転換する時期をいくつか見いだすことができる。中国の歴史においては，前漢王朝の武帝の時代を一つの転換期と見なす見方がある。この武帝の時代はどのような意味で転換期と見なすことができるのか，下記の語句を参考にしつつ，統治の在り方の側面と社会・経済の側面とを関係づけながら 350 字以内(句読点を含む)で論述しなさい。

郡国制　一君万民　対外膨張策　塩・鉄・酒の専売

郷挙里選　九品中正

武帝は,高祖以来の郡国制が呉楚七国の乱鎮圧により実質的な郡県制に切り替わるなかで即位し,皇帝が官僚を用いて農民たちをおさめる一君万民の体制を目指して中央集権化を進めた。前漢の初めには法家や道家の思想が影響力を持ったが、武帝は董仲舒の献策にもとづいて五経博士を置き,儒学を官学として国家統治の支柱としたため,以後歴代王朝に受け継がれた。この儒学の理念により人材を登用するために、地方の有徳の人物を推薦させる郷挙里選を開始した。これは魏晋南北朝時代の九品中正に継承されて,門閥貴族勢力の形成に影響を与えた。さらに、蓄積された国力をもとに対外膨張策へと転じて領土を拡大したが,財政難となったため，均輸法や平準法などの経済統制策だけでなく,塩・鉄・酒の専売を始め，これも歴代王初の財源となっていった。

「武帯時代に目指された「統治のあり方」を，郡県制に基づく一君万民の体制と捉え，「社会」面では儒学の官学化とそれにもとづく官吏登用制度の発展を「経済」面では外征による財政難

打開のための専売制度の実施を指摘する。また，「転換期」とあるので，武帝時代にはじまる諸制度が，歴代王朝に踏襲されていった点も忘れずに述べること。」

京都大学

中央ユーラシアの草原地帯では古来多くの遊牧国家が興亡し，周辺に大きな影響を及ぼしてきた。中国の北方に出現した遊牧国家，匈奴について，中国との関係を中心にしつつ，その前 3 世紀から後 4 世紀初頭にいたるまでの歴史を 300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

スキタイ文化の影響を受けて騎馬遊牧民化した匈奴は，戦国時代の中国に侵入を繰り返した。これを防ぐために燕，趙が築いた長城を秦の始皇帝が修築・連結し，遠征軍を派遣した。しかし漢の高祖は，前 2 世紀の冒頓単于のもとで全盛期を迎えた匈奴に破れ，以後融和策をとったが，武帝時代には張騫を大月氏に派遣したり遠征軍を送るなど，積極的に反撃策を開始した。その後衰退した匈奴は前 1 世紀に東西に分裂し，西匈奴は滅び東匈奴は漢に服属したが，後 1 世紀には南北に分裂した。北匈奴は西方に移動したが，南匈奴は後漢に服属し長城付近に定着した。晋に八王の乱が起きると匈奴を含む五胡が華北に侵入し，この混乱の中で 4 世紀初頭晋は滅亡した。

京都大学

中国の「三教」，すなわち儒教・仏教・道教のうち，仏教・道教は大衆にも広く浸透し，中国社会を変容させてきた。仏教・道教が中国に普及し始めた魏晋南北朝時代における仏教・道教の発展，および両者が当時の中国の政治・社会・文化に与えた影響について，300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

華北では4世紀に西域出身の仏図澄や鳩摩羅什が訪れ，仏教の布教や仏典漢訳を行った。また東晋の僧法顕は，仏典を求めてインドを訪れた。当時の仏教は華北では庶民まで広まり，石窟寺院が造られた。江南では貴族の教養として受け入れられ，南朝の首都建康には多数の仏寺が建てられ，貴族文化に影響を与えた。こうして仏教は江南では国家や貴族の保護を受けて栄えた。この結果，浄土宗，禅宗などの宗派が成立し，中国仏教の主流となった。他方で後漢の太平道や五斗米道を源流とし，老荘思想や神仙思想が加わって，北魏の寇謙之が道教教団を確立した。北魏の太武帝は道教を国教とし仏教を弾圧したが，すぐに復興し両宗教は民衆に定着していった。

6 世紀から 7 世紀にかけて，ユーラシア大陸東部ではあいついで大帝国が生まれ，ユーラシアの東西を結ぶ交通や交易が盛んになった。この大帝国の時代のユーラシア大陸中央部から東部に及んだイラン系民族の活動と，それが同時代の中国の文化に与えた影響について，300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。　　京都大学

ソグディアナ地方のサマルカンドを拠点に東西交易に従事したイラン系ソグド人によって，東西文物の交流が進んだ。オアシス都市を結んで中国の生糸や絹が西方に伝えられたので絹の道と呼ばれているが，ソグド語やソグド文字は中央アジアの共通語・共通文字として広く使用された。6 世紀に強大化した突厥はソグド人を交易や外交に用いた。ソグド人はゾロアスター教やマニ教，ネストリウス派キリスト教を唐代の中国に伝えたが，その結果それらの寺院が長安に建築され，大秦景教流行中国碑も建てられた。ササン朝の滅亡後はイラン系の人々が多数移住し，イラン系風俗が流行した。またアラビアやペルシアの商人が来航し，長安は国際都市として栄えた。

隋を受け継いで大帝国を樹立した唐は，近隣の諸国や諸民族に大きな影響を与えた。唐の文化を受容し，あるいは唐と政治的関わりをもったモンゴル高原，チベット，雲南地方の諸国や諸民族の7世紀から9世紀にかけての興亡について，300 字以内で述べよ。

京都大学

羈縻政策

モンゴル高原ではトルコ系の東突厥が 7 世紀以前半に唐の攻撃を受け衰退し，都護府の監督下に入った。東突厥は 7 世紀末に一時強大な勢力となったが，8 世紀半ばにトルコ系のウイグルに滅ぼされた。ウイグルは安史の乱で唐を援助するなど強大な勢力を誇ったが，9 世紀前半にトルコ系のキルギスの侵入を受けて滅亡した。

チベットでは 7 世紀にソンツェン=ガンポによって吐蕃が建国され，その後安史の乱に乗じて一時唐の都長安を占領したが，9 世紀には唐との関係を改善して会盟を結んだ。

雲南地方では 8 世紀後半，唐とチベットの争いに乗じて，チベット＝ビルマ系の南詔国が勢力を伸ばし唐の冊封を受け，漢字や仏教を取り入れて繁栄した。（一方，9 世紀には安南都護府を壊滅）

唐から宋への時代の変化を、政治・軍事制度の側面から具体的に 300 字以内で述べよ。

京都大学

＜解答例1＞

政治的には，唐において権勢を誇った門閥貴族の没落とそれに伴う皇帝権力の強化，三省六部制の変質があげられる。

唐では門閥貴族が皇帝との合議制で政治を運営し，皇帝の政策を制限した。

貴族は安史の乱～唐末五代の混乱期に没落し，変わって新興地主層(形勢戸)が台頭

宋では殿試新設などで科挙制を整備して新興地主層を官僚に登用し，門下省を事実上廃止して皇帝独裁体制を樹立した。

軍事的には節度使による地方割拠状態から皇帝直属の軍である禁軍強化への変化。

唐の玄宗が始めた募兵制とほぼ同時に設置された節度使の強大化が唐を滅ぼす一因となる。

宋では文治主義をとり節度使の権限を削減し，禁軍を強化して軍事的にも中央集権を確立した。

＜解答例2＞

唐は第二代太宗のとき、律令体制が確立

政治体制は、科挙で採用した官僚を三省六部などに組織したが貴族官僚が有力で貴族政治であった

軍事体制は、兵農一致で徴兵する府兵制を実施

唐代半ばで安史の乱が起こる　均田制は崩壊し、荘園制が発展し均田農民が没落

府兵制は募兵制となり、節度使が藩鎮化して皇帝の政治的支配が弱まった

　　唐末五代の社会変革期に、貴族が没落し、新興地主が台頭

この乱を統一した宋　軍制＝募兵制により、節度使の軍隊を禁軍に再編成

政治＝文治主義をとり、科挙に殿試を加え新興地主を皇帝直属の官僚に採用して皇帝独裁体制を樹立

4 世紀から 12 世紀にかけて，長江下流地域(江南地方)における開発が進み，中国経済の中心は華北地方からこの地域に移動した。この過程を，300字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。　　**京都大学**

4 世紀初めに晋が滅亡し，晋の一族は江南に逃れ建康を都とする東晋を建てた。五胡十六国時代となった華北からは漢民族が多数移住し，長江中・下流の開発が進んだ。隋の時代に大運河が完成し，江南の物資を華北へと水運での輸送が可能となった。10 世紀後半，宋は大運河と黄河の接点で物資集散の要衝である開封に都を定めた。12 世紀前半に宋が滅びると，臨安を都とする南宋が成立した。江南への移住が進むと，干拓などによる新田開発が進み，成長の早い占城稲が導入された。この結果，長江下流は穀倉地帯となり，「蘇湖熟すれば天下足る」といわれた。茶や陶磁器の生産も増え，国外へも輸出されて杭州などが海上交易で栄えた。

中国の科挙制度について，その歴史的な変遷を，政治的・社会的・文化的な側面にも留意しつつ，300 字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。　**京都大学**

九品中正法が豪族の門閥貴族化を招いたため，隋の文帝は学科試験による科挙を始めた。唐代は貴族中心の社会であったが，則天武后は積極的に科挙官僚を登用した。また科挙では儒教の他に詩作も重視したため，多くの詩人を輩出した。唐末五代の時期に貴族は没落し，宋では新興地主層が科挙官僚となり，儒教や詩文の教養を持つ士大夫層が社会の中心となった。また最終試験として殿試が設けられ，君主独裁体制を強化した。元では科挙が一時廃止されたが，明では朱子学が官学となり『四書大全』や『五経大全』が編纂された。明，清では科挙合格者であった郷紳が地方の有力者となった。列強進出の中，清朝末期の改革の一環として 1905 年廃止された。

京都大学

宋代以降の中国において，様々な分野で指導的な役割を果たすようになるのは士大夫と呼ばれる社会層である。彼らはいかなる点で新しい存在であったのか。これについて，彼らを生み出すにいたった新しい土地制度と，彼らが担うことになる新しい学術にも必ず言及し，これらをそれ以前のものと対比しつつ 300 字以内で述べよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

唐末五代の戦乱期に貴族が没落すると，これに代わって宋代に形勢戸と称される新興の地主層が台頭した。彼らは貴族のように荘園を直接経営し自給的生活を送るのではなく，買い集めた土地を佃戸と呼ばれる小作人に貸して小作料をとることで経済力を伸張させた。一方，儒学の分野でも，それまでの経典の字句解釈を重んずる訓話学に代わり，経典全体を哲学的にとらえて宇宙万物の正しい本質に至ろうとする宋学がおこった。こうした新しい学問を担ったのが経済力をつけた形勢戸であり，彼らは貴族のようにその地位を世襲するのではなく，科挙に合格することにより官界に進出して士大夫層を形成し，さまざまな分野で指導的役割を果たした。

元の時代の交通・商業について250字以内で論述せよ。なお，論述するにあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

駅伝制　　海運　　銀　　交鈔　　ムスリム商人

モンゴル帝国の初期の時代から交通路の整備や国際商人の保護を推進し，カラコルムを中心にジャムチという<u>駅伝制</u>をしいて，陸上の交通・通信のネットワークを形成した。また江南地方と大都を結ぶ大運河のみならず山東半島を経由する<u>海運</u>も開かれ，大都は経済の中心地である江南だけでなく，海路を通じて南方とも結ばれることとなった。こうした陸上・海上の交易活動に従事したのが<u>ムスリム商人</u>であった。貨幣としては<u>銀</u>が基本であったが，その補助として<u>交鈔</u>という紙幣が用いられた。

フビライ=ハン(元の世祖)の治世上の業績を領上の拡張，中国支配体制の整備の両面から 300 字以内で具体的に述べよ。　京都府立大

フビライ=ハンは，南宋を滅ぼして中国全土を支配下においたほか，ビルマのパガン朝も滅ぼしたが，日本やジャワ，ベトナムなどの遠征には失敗した。中国的な管制を採用したり，州県制を行うなど従来の中国の支配体制を継承した。しかし，実質的な政策決定はモンゴル人が行い，色目人と呼ばれる中央アジアや西アジア出身の諸民族を財政官僚として重用した。そして、金の支配下にあつた人々を漢人，南宋の支配下にあった人々を南人と呼んで支配し，科挙も中断した。その一方で、ジャムチの維持や大運河の補修，海運の整備などを行い，商業の発達に努めた。(300 字)

中国の皇帝独裁制(君主独裁制)は，宋代，明代，清代と時代を経るにしたがって強化された。皇帝独裁制の強化をもたらした政治制度の改変について，各王朝名を明示しつつ 300 字以内で述べよ。

京都大学

宋は節度使の権限を奪い文官を重用する文治主義の採用や皇帝に直属する禁軍の強化，宰相の権限の分散化，科挙の最終試験である皇帝自らが臨席する殿試の創設などによって，皇帝独裁制を実現した。明代では中書省と宰相の廃止により行政の最高機関となった六部と監察・軍事の最高機関を皇帝直属としたため，皇帝独裁制はより強化された。しかし，永楽帝時代に設置された内閣大学士が後に実質上宰相の実権を持つに至った。征服王朝の清は内閣など明の諸制度を受け継ぐ一方，八旗など女真族独自の軍事・行政組織も維持し皇帝権力を支えた。雍正帝時代には軍事機密保持のため軍機処が設置され，後に内閣に代わる政治の最高機関となった。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。14 世紀なかばから 18 世紀末にかけての明・清の海上貿易管理体制について，それに対する国家・集団の動向に注目しながら，以下の語句を用いて説明しなさい。

海禁政策　　後期倭寇　　公行　　台湾　　琉球王国

14 世紀なかばに明朝を立てた洪武帝は，海禁政策をとって民間人の海上貿易を禁じ，政府の管理する朝貢貿易を推進した。15 世紀初めに成立した琉球王国は，明朝の冊封を受けて朝貢貿易に加わり，中国と東シナ海・南シナ海とを結ぶ中継貿易を行って繁栄した。しかし，16 世紀になると密貿易を行いながら中国沿岸を襲撃する後期倭寇の活動が激化して明朝を苦しめ，明朝はやむを得ず海禁を緩めた。17 世紀なかばに明朝が滅亡して清朝が中国に進出すると，鄭成功とその一族が武装貿易船団を率いて抵抗を続けたため，清朝は厳しい海禁によってその財源を絶ち，鄭氏を降して台湾を占領した後に海禁を解除して海上貿易を推進した。18 世紀なかばに乾隆帝はヨーロッパ船の来航を広州 1 港に制限し，公行という特定の商業組合に貿易を管理させた。18 世紀末にイギリスはマカートニーを清朝に派遣して，広州以外の開港など貿易の拡大を要求したが，乾隆帝はこれを拒否した。

中国史上の唐から清に至るまでの徴税・労役制度について，以下の語句を用いてどのような変遷が見られたかを 400 字以内でまとめなさい。

両税法　　魚鱗図冊　　地丁銀　　租庸調　　一条鞭法

唐初の税役制度は北魏以来の均田制を受け，政府が成年男性に土地を配給し，租庸調すなわち穀物，絹や麻，労役ないしその代納品を課した。人を基準に均等に土地を給したうえで現物と労役を徴収する制度であり，古代日本にも影響があった。やがて土地兼併が進展したため，780 年に所有する土地の面積に応じて夏と秋の二回に原則として銅銭で納める両税法に変更され，明まで継承された。明初に全国的調査により租税台帳である賦役黄冊と土地台帳である魚鱗図冊がつくられ，富裕な戸に徴税責任を負わせる里甲制を施行した。16 世紀半ばにメキシコ銀が流入する中で，複雑な税役項目を簡素化して銀納とする一条鞭法が段階的に試みられ，ついに清になり 18 世紀前半に人頭税を土地税に繰り込む地丁銀の制度が成立した。一人一人に均等に現物と労役を課する制度から，資産に応じた額を設け，複雑な税役項目を単純化し，貨幣で徴収する形へと変遷することが見られた。

14 世紀から 17 世紀までのモンゴル系諸勢力の歴史について，以下の語句を用いて説明しなさい。

永楽帝　　紅巾の乱　　ジュンガル　　土木の変　　ホンタイジ　　**筑波大学**

モンゴルが建てた元は 13 世紀後半に中国全土を支配下に収めていたが，14 世紀に入ると放漫財政や内紛に加えて飢謹が相次いだために混乱し，紅巾の乱のなかから台頭した朱元璋が明を樹立して，元の帝室はモンゴル高原に退いた。ついで 15 世紀前半には，明の永楽帝がモンゴルに対して親征を繰り返した。15 世紀なかばには西方のオイラトが台頭して実権を握り，エセン＝ハンは土木の変において明の正統帝を捕らえた。16 世紀になるとモンゴルはアルタン＝ハンのもとで強大化し，明の貿易統制に対抗してしばしば長城を突破し，ついには明に交易場の開設を認めさせた。17 世紀初めに中国東北で女真のヌルハチが後金を建てると，後を継いだホンタイジは内モンゴルに進出して元の直系のチャハル部を従え，皇帝に即位して国号を清と改めた。清はさらに明滅亡後の中国を征服した後，康熙帝の時代にジュンガルを打ち破って外モンゴルをも従え，モンゴル全体が清の藩部に組み込まれた。

4 世紀から 13 世紀における江南(長江下流域)の経済発展と中国王朝の興亡との関連について，以下の語句を用いて説明しなさい。

朱全忠　隋　　占城稲　大都　　東晋　　**筑波大学**

4 世紀に匈奴が西晋を滅ぼして華北に五胡が割拠するようになり，西晋の一族が江南で東晋を樹立すると，多数の漢人が華北から江南に移住して開発を進めた。南北朝時代を経て 6 世紀に隋が中国を統一すると，煬帝は江南と華北を結ぶ大運河を完成させた。続く唐代には経済の中心が次第に江南に移り，唐は安史の乱によって弱体化したが江南からの税収によって支えられた。10 世紀に唐を滅ぼして後梁を建てた朱全忠は黄河と大運河の接点にある開封に都を置き，後晋・後漢・後周，そして北宋も開封に都を定めた。宋代の江南では低湿地の干拓や占城稲の導入がなされて「蘇湖熟すれば天下足る」と言われたほか，茶・絹・陶磁器の生産も盛んになり，商業中心地の蘇州や海上貿易の拠点となった杭州・寧波などの都市が発達した。12 世紀に金が北宋を滅ぼし，杭州を都として南宋が建てられた後，13 世紀に元が南宋を滅ぼすと，江南と都の大都を結ぶ大運河が整備され，海運も発達した。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。元・明・清の各時代における儒教を中心とする学問・思想の変遷について，支配体制と社会情勢に関連させて，以下の語句を用いて説明しなさい。

王陽明　　科挙　　考証学　　康有為　　『四庫全書』

筑波大学

元はモンゴル人第一主義を採り，かつ色目人を重用したため，官僚登用試験である科挙を中止した時期が長く，儒教は振るわなかった。知識人の中には詩作や芸術に従事する者が増えた。明は儒教を奉じる知識人の協力を得て国家体制を整えたが，しだいに思想的停滞に陥り，不満を持った王陽明は，心の中の良知を働かせて知識と行動を一致させる思想を説いた。庶民の生活が豊かになった明末には人間の欲望や本来の心を強く肯定する考え方が現われ，また一方では経世のための実証的学問も盛行した。清は中国内地の統治に儒教を利用し，知識人を動員して図書編纂事業を行い，『四庫全書』を完成させた。その目的の一つは，反清思想に対する検閲統制であった。こうした中で知識人は政治から距離を保ち，旧来の思想の空論化を批判し，実証的な考証学を展開した。清末の社会危機の中で康有為により孔子を尊崇しながらも政治制度の改革を正当化する思想が再評価された。

6 世紀から 14 世紀までの朝鮮半島における諸国家の興亡について，隣接する勢力との関係に留意しながら，以下の語句を用いて 400 字以内で説明しなさい。　　筑波大学

元　　高麗　　新羅　　白村江　　李成桂

6 世紀の朝鮮半島には北部に高句麗，東部に新羅，南部に百済と三国が並び立つ情勢となっていた。7 世紀に中国の隋は繰り返し高句麗に遠征したが，その失敗を機に滅亡し，唐が興った。唐は新羅と連合して，高句麗と百済を破り，勢力圏を拡大した。唐と新羅に攻められた百済に日本は援軍を送ったが，白村江で敗戦した。新羅は唐の影響を排除して半島を統一し，唐の官僚制を導入する一方，骨品制により身分制社会を維持しつつ，仏教を発展させた。10 世紀に唐が滅亡し，渤海が契丹に降伏する情勢の中で，王建が新羅を滅ぼし，開城を都として高麗を建て半島を統一した。高麗は仏教を保護して『大蔵経』を刊行し，また独自の青磁を製造し中国へも輸出した。12 世紀に武臣が政権を握り，13 世紀になるとモンゴルの元が侵入し，その属国となり，日本遠征の拠点とされ，反元派と親元派が争った。14 世紀末に紅巾の賊や倭寇を撃退した李成桂が，高麗を倒して李氏朝鮮を建てた。

4 世紀後半，朝鮮半島には高句麗・百済・新羅が並び立つ形勢が生まれ， 7 世紀には三国の抗争は，新羅が半島中南部を統一することによって終結した。4 世紀から 7 世紀までの朝鮮半島における情勢の推移について，中国王朝との関係を含めて，200 字以内で説明しなさい。その際，下記の語句を必ず使用し，その語句に下線を引きなさい。

楽浪郡　　加羅諸国　　煬帝

半島北部の高句麗は西晋末期の混乱に乗じて楽浪郡を滅ぼし南西部の百済をも圧迫した。南東部の新羅は 6 世紀には加羅諸国を併合し，勢力を拡大した。隋による中国統一後，煬帝は 3 回にわたる高句麗遠征を行ったがいずれも失敗した。しかし 7 世紀後半には唐と新羅が同盟を結んで百済・高句麗を滅ぼし，また百済再興を目指す日本の水軍をも白村江で撃破した。その後，新羅は唐の勢力を大同江以北に排除し，半島の統一を達成した。

【ヨーロッパ史編】

筑波大学

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。
ミケーネ時代から紀元前 6 世紀までのギリシア本土と地中海におけるギリシア人の都市文化について，以下の語句を用いて説明しなさい。

アゴラ　　オリンピア　　集住(シノイキスモス)　植民市　　線文字 B

前 1600 年から前 1200 年頃，アカイア人がミケーネ地方において巨石城塞を築き，線文字 B を用いて粘土板に行政記録を残した。このミケーネ文明の終焉後，数百年の不透明な時代をへて，前 8 世紀にはギリシア各地で王や貴族が主導する集住(シノイキスモス)が始まり，アクロポリスやアゴラを含む城壁都市と周囲の田園地帯からなる 1000 以上もの都市国家[ポリス]が成立した。そこでは主として王族，貴族，成年男子を中心とする政治が行われ，奴隷制が発達した。ポリスの間には抗争が絶えなかったが，共通の言語，文化，宗教を通じて汎ギリシア的連帯が保たれ，前 776 年からは 4 年ごとにゼウス神の聖所であるオリンピアにおいて競技会が催されてポリス間の親睦が図られた。一方，人口増加やポリス間の抗争を受けて，新天地を求めるギリシア人が黒海や地中海各地に進出して多数の植民市を建設し，ギリシア文化の拡大と交易活勤を促進した。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。
アレクサンドロス大王の東方遠征の経過について，以下の語句を用いて説明しなさい。

アレクサンドリア　　インダス川　　ダレイオス 3 世　　バクトリア　　マケドニア

マケドニア王フィリッポス 2 世は，カイロネイアの戦いでアテネ・テーベ連合軍を破り，コリント同盟のもとにギリシアのポリスを服属させた。フィリッポス 2 世の息子アレクサンドロス大王は，ギリシアに干渉するアケメネス朝ペルシアに向けて，前 334 年にマケドニア・ギリシア連合軍を率いて東方遠征に出発した。大王は，イッソスの戦い，さらにその後のアルベラの戦いでダレイオス 3 世の軍を破った。この結果，前 330 年にアケメネス朝ペルシアは滅亡したが，大王はさらに軍を進め，中央アジアのバクトリアからインダス川流域までをも征服した。部下がそれ以上の進軍を望まなかったため大王の軍は引き返したが，短期間にエジプト，メソポタミア，イラン地方を含む大帝国が建設された。大王は帝国各地にギリシア風のアレクサンドリア市を建設したが，中でもエジプトのアレクサンドリア市はプトレマイオス朝の首都として繁栄し，ヘレニズム文化の中心となった。

名古屋大学

前 508 年に，ギリシアのアテネではクレイステネスの改革によって民主政の礎が据えられたが，伝承によれば，ローマでもほぼ同じ頃(伝承では前 509 年)に王政が廃されて共和政への道が拓かれた。アテネの民主政とローマの共和政は，ともに市民社会を実現するためのモデルを近代以降の世界に提示することになるが，両者のあいだには相違点もまた少なくない。両者の類似と相違がアテネとローマそれぞれの歴史的展開にどのような影響を与えることになったのか，下記のキーワードを参考にしながら(必ずしも，これらのすべてに言及する必要はない)350 字以内で論述しなさい。　元老院　民　会　貴族(パトリキ)　陶片追放　市民権　執政官(コンスル)　帝　政　抽　選

類似点は，市民が武器を自弁して参加する重装歩兵が軍隊の中核となり，貴族に対する平民の参政権を拡大していった点である。相違点は，アテネでは陶片追放により僭主の出現を防止し，ペルシア戦争の結果，成年男性市民の参加する民会が国政の最高機関となり，官職も一部を除き抽選で選ばれるなど民主政がおおいに発展したが，ローマでは平民が執政官に就任できるようになったものの，帝政期に至るまで元老院が実質的な指導権を持ち続けたことである。さらにアテネでは，ペリクレス時代に市民権の付与を両親がアテネ市民であるものに限定したため，都市国家の枠組みを超えられず，結局マケドニアに服属した。一方ローマでは，領土の拡大とともに市民権を開放し，212 年にはカラカラ帝によって全自由民に市民権を与えて，世界帝国となった。

〇類似点では，重装歩兵による平民の身分的な上昇を指摘する。

〇相違点では，民主政が発展したアテネに対し，元老院の力が強かったローマを，また，市民権を制限したアテネに対し，市民権の拡大によって世界帝国へと成長したローマをそれぞれ対比する。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

395 年のローマ帝国の東西分裂の後，4 世紀末から 8 世紀前半までの時期を経て，ビザンツ(東ローマ)帝国は，小アジアとバルカン半島を主たる領土とした独自の世界を形成するに至る。その歴史的過程について，以下の語句を用いて説明しなさい。

イスラーム　ギリシア正教会　ササン朝ペルシア

スラヴ人　ユスティニアヌス

筑波大学

395 年のローマ帝国の東西分裂後，西ローマ帝国は 476 年にゲルマン人傭兵隊長オドアケルにより消滅したが，東ローマ帝国は西方のゲルマン系諸国と東方のササン朝ペルシアに対抗して，その勢力を維持した。6 世紀半ばには，ユスティニアヌス帝が，積極的に外征を重ねて地中海の覇権を確立し，かつてのローマ帝国の威信を一時的に回復した。しかし，その後，6 世紀末から 7 世紀の初めにかけて，ササン朝とアラブ人によるイスラーム勢力によりシリア，エジプト，北アフリカなどが奪われ，ランゴバルト王国やフランク王国によりイタリアが失われ，バルカン半島にはスラヴ人やトルコ系ブルガール人が侵入して，帝国版図は小アジアとバルカン半島南部に限定された。これを受けて，7 世紀以降，ビザンツ帝国は急速にギリシア化し，ギリシア正教会を影響下に置き，ギリシア語を公用語とする，ローマ帝国とは異なるギリシア的・東方的ビザンツ文化圏を形成した。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。紀元前 1 世紀から紀元後 376 年までのローマとゲルマン人の関係について，以下の語句を用いて説明しなさい。

カエサル　　軍人皇帝時代　　『ゲルマニア』　　東ゴート族　　フン族　　**筑波大学**

前 1 世紀におけるカエサルのガリア征服の結果，ローマとゲルマン人はライン川を挟んで恒常的接触を持つようになった。アウグストゥスは，国境防衛体制を整備し，ゲルマン人とも比較的平穏な関係を保つことに成功した。そして以後 200 年近くにわたって「ローマの平和」が続いた。しかし，この間にタキトゥスは，『ゲルマニア』を著し，質朴なゲルマン人の姿を描くことで，柔弱なローマ社会に警告を発した。この危惧が最初に現実化したのは，軍人皇帝時代であり，この時代にゲルマン人は，北方から激しくローマ帝国内に進入し，その安定を脅かした。軍人皇帝時代を収拾したディオクレティアヌスによっていったん帝国の安定は取り戻されたが，375 年のフン族の西進によって東ゴート族がまずこれに服従し，続いて圧迫を受けた西ゴート族が翌 376 年にローマ領内に逃げ込んだことで，ゲルマン人の大移動が始まり，この動乱の中，西ローマ帝国は滅亡した。

現代においてユダヤ人はパレスチナ地域だけではなく広く世界各地に離散した形態で生活している。しかし，このようなユダヤ人の離散状況(ディアスポラ)は近代に至って始まったわけではなく，既に古代において周辺諸国による政治的従属化が契機となって発生していた。キリスト教化の過程が比較的短期間の内に地中海世界の広範囲に渡って進捗したのも，それが主に，このような形で各地に散在していた会堂に集まったユダヤ人の改宗から始まったからである。では，紀元前十世紀初頭に成立したダビデ王朝以降，ユダヤの民はどの周辺民族の支配に甘んじ，どのような事件がきっかけとなって世界各地に離散していったのか。時系列に沿って離散を促した事件を指摘しつつ，ユダヤ人国家がローマ帝政期に至るまでに経験した対外的関係の変遷の概略を示しなさい。ただし，以下の語句を使い，最初に用いた箇所に下線を付すこと。

〔語句〕アッシリア　　アケメネス朝ペルシア　　新バビロニア

南・北王国への分裂　　マケドニア　　ローマ　　**千葉大学**

ダヴィデ，ソロモン両王の時代に繁栄した王国は，前 10 世紀末に南・北王国への分裂が起こり，北のイスラエル王国は前 8 世紀にアッシリアに滅ぼされた。南のユダ王国も前 6 世紀に新バビロニアに滅ぼされ，多くの人々が強制移住させられるという「バビロン捕囚」が起こった。前 6 世紀後半，アケメネス朝ペルシアが新バビロニアを滅ぼすとユダヤ人は解放され，帰国を許された。その後イェルサレムにヤハウェの神殿を再興し，こうした受難の歴史の中でユダヤ教が確立されていった。前 4 世紀後半，マケドニアのアレクサンドロス大王が東方遠征を行いアケメネス朝ペルシアを滅ぼした結果，マケドニアに支配されるところとなったが，大王の死後帝国は分裂し，セレウコス朝シリアがパレスチナの地を支配するようになった。前 2 世紀中頃ユダヤ人の王朝としてハスモン朝が独立するが，前 1 世紀中頃にローマに滅ぼされ，ローマの属州となった。イェルサレムの神殿を中心にユダヤ教を信奉していたユダヤ人たちは，ローマ帝国による属州支配に対して 2 度にわたる大規模な反乱(ユダヤ戦争)を起こした。しかしローマ帝国によって鎮圧され，神殿は破壊されてユダヤ人は立ち入りを禁止され，故地を追われて各地に散らばるという離散状況となっていった。

十字軍の運動が始まる頃には，西ヨーロッパ世界はローマ＝カトリック教会の下で統合され，独自の文明として自己を主張し始めたように見える。だがキリスト教会は古代ローマの時代から着々とその組織づくりをおこなってきていた。このキリスト教会の動きに注目しながら，十字軍が開始されるまでの西ヨーロッパ世界の形成について，以下の語句を用いて，400 字以内で説明しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。

イスラーム教徒　クローヴィス　聖像禁止令　ニケーア公会議　800 年　**筑波大学**

ローマ皇帝コンスタンティヌスはミラノ勅令でキリスト教を公認し，ニケーア公会議を主宰して教義を統一し，アタナシウス派を正統，アリウス派を異端とした。その後ローマ帝国が東西に分裂し，ゲルマン人の大移動によって西ローマ帝国が滅びると，西方世界の統一はキリスト教会に託されることになった。フランク族のクローヴィスは正統のアタナシウス派に改宗したことにより，教会と親密な関係を持つことができた。さらに宮宰カール＝マルテルはピレネーを越えて進出してきたイスラム教徒をトゥール・ポワティエ間の戦いで撃破してキリスト教を守った。西暦 800 年，ローマ教皇レオ3世はカロリング朝のカールに帝冠を与え，西ローマ帝国を復活させた。かくして東ローマ帝国の支配から自由になったローマ＝カトリック教会は聖像禁止令をめぐるビザンツ皇帝との論争に終止符を打ち，ギリシア正教会と別れて独自の道を歩き始めた。

次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文中では指定された語句に下線を施すこと。
現代のドイツ領土は，かつての神聖ローマ帝国を基盤としている。神聖ローマ帝国の名称の由来，その 15 世紀末までの変遷について，以下の語句を用いて説明しなさい。
オットー1世　金印勅書　皇帝による統一　領　邦　イタリア政策　**筑波大学**

ローマ帝国の復興をめざした東フランク[ドイツ]王のオットー1世は，北イタリアに出兵して教皇を援助し，962 年に教皇から帝冠を授けられた。ドイツ王が皇帝の称号を受け継ぐことになったことが，神聖ローマ帝国の起源である。その後の皇帝はイタリア政策に力をそそいで，本国の統治をおろそかにしたため，諸侯の自立の傾向が強く，皇帝による統一が達成されなかった。13 世紀には皇帝不在の大空位時代もあり，カール4世の時代の 1356 年に金印勅書が出されて，聖俗の7諸侯が選帝侯として皇帝を選出することが定められた。15 世紀半ばからはハプスブルク家から皇帝が選出されたが，混乱は収拾されず，諸侯や都市など，300 あまりの領邦が分立した。
次の問について，400 字以内で解答しなさい。なお，解答文の中では指定された語句に下線を施すこと。
西ローマ帝国滅亡後から8世紀後半までのイタリアの政治情勢について以下の語句を用いて述べなさい
(なお，以下の語句のうちランゴバルドはロンバルドと表記される場合もある)。

ピピン　ランゴバルド　東ゴート　ユスティニアヌス　カール大帝　**筑波大学**

西ローマ帝国滅亡後，イタリアを支配したのはオドアケルであったが，やがて 493 年，テオドリック率いる東ゴート族がイタリアに侵入，これを破り，東ゴート王国を建てた。東ゴート王国時代にイタリアは一時安定を享受したが，間もなく東ローマ皇帝ユスティニアヌスの遠征を受け，東ゴート王国は 555 年に滅亡した。しかしながら，東ローマ帝国のイタリア支配も長くは続かず，ユスティニアヌスの死後，ゲルマン人の一派ランゴバルド人がイタリアに侵入，東ローマ帝国のイタリア領の大半を奪って，ランゴバルド王国を建設した。8世紀の半ばになると，ランゴバルド王国に脅かされた教皇の要請を受け，フランク王国がイタリアに介入するようになる。ピピンはイタリア遠征を行い，その領土の一部を奪い，ラヴェンナ地方を教皇に寄進した。最終的にカール大帝が 774 年にランゴバルド王国を倒し，イタリアの大部分をフランク王国に併合した。

現在，ヨーロッパと呼ばれている地域の周辺部で展開した歴史について，以下の問いに答えなさい。

9～10 世紀以降ローマ＝カトリック圏に侵入したノルマン人やマジャール人は，10 世紀後半以降ローマ＝カトリックを受け入れ，その重要な構成員となった。これによりローマ＝カトリック圏は拡大した。以上の過程について，彼らによる国家形成にも触れながら説明しなさい。なお，次の語句を必ず用い，それらの語句には全て傍線を引くこと(250 字程度)。

ハンガリー　　ノルマンディー
スカンディナヴィア　　イングランド　　**大阪大学**

スカンディナヴィア半島周辺を原住地とするノルマン人は,デンマーク・ノルウェー・スウェーデンなどの王国を建国する一方，ヨーロッパ各地に海上遠征を繰り返した。その一派のロロは北フランスにノルマンディー公国を建て,カトリックに改宗した。その後ノルマンデイー公ウィリアムがイングランドにノルマン朝を,ルッジェーロ 2 世が南イタリアに両シチリア王国を建国した。一方,東方からはウラル系のマジヤール人が侵入し,オットー1 世に西進を阻止されハンガリーに定住し王国を建て，カトリックに改宗した。

中世初期のノルマン人の活動とその影響について論述せよ。なお，論述するにあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

カヌート　　シチリア　封建制度　　ルーシ　　ロロ　　京都府立大学

航海技術を持ち，商業や海賊行為を行ったノルマン人(ヴァイキング)はヨーロッパ各地に進出し建国した。911 年ロロは北フランスにノルマンディー公国を，ルーリックの率いる一派ルーシ 9 世紀にロシアにノヴゴロド国を，ついでキエフ公国を建てた。地中海に進出した一派は 12 世紀にはシチリア島をイスラーム勢力から奪い，南イタリアとあわせて両シチリア王国を建てた。またノルマンの一派デーン人はアングロ＝サクソン王国のイングランドに侵入したが，9 世紀末のアルフレッド大王はこれを撃退した。しかし，1016 年にはカヌートがイングランドを一時征服した。西ヨーロッパではイスラーム勢力の侵入に加え，フランク王国が分裂したころからこのノルマン人やマジャール人の侵入を受けた。こうした外敵の侵入から守るために，封土を媒介として軍役義務を課す主従関係が成立した。この主従関係を封建制度という。

12 世紀に至る聖職叙任権闘争について 400 字以内で論述せよ。なお，論述するにあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

1122 年　カノッサ　クリュニー　妻帯　ハインリヒ 4 世　京都府立大

カロリング朝以降，ゲルマン人の皇帝や国王が聖職叙任権を持っており，とくに神聖ローマ皇帝は，これを統治の支柱としたが，皇帝の都合によって聖職者にふさわしくない人物が任命されることが多かった。これに対して 10 世紀以降にクリュニー修道院などで協会刷新運動が始まると，これは教会全体の改革へと発展した。教皇グレゴリウス 7 世は聖職売買や妻帯を禁止し，改革を進めることで教皇権の拡大をはかった。さらに教会腐敗の原因が皇帝や国王など俗人による聖職者の叙任であるとして禁止した。この決定は帝国の統治を揺るがすものであったため，当時の皇帝ハインリヒ 4 世との間で叙任権闘争を引き起こした。教皇が皇帝を破門すると，ドイツ諸侯の皇帝への離反が起きたため，ハインリヒは 1077 年カノッサで教皇に謝罪した。この闘争は 1122 年にウォルムス協約で妥協が図られ，カトリック圏の全ての聖職叙任権は教皇にあるとされ，帝国教会政策は挫折した。

476 年に西ローマ帝国がほろびた後，西ヨーロッパではフランク王国が中世世界の形成に大きな役割を果たした。そして 10～11 世紀に西ヨーロッパ中世世界の基本的な骨組みとなる封建社会が成立する。西ヨーロッパ中世世界に特有のしくみと言われる封建社会の成立過程を，同じ頃(7～10 世紀)のビザンツ帝国の社会の特徴と比較しながら，350 字以内で説明しなさい。説明に当たっては，以下の語句を参考にすること(必ずしも，これらのすべてに言及する必要はない)。

封建的主従関係，　荘園，　外敵の侵入，　中央集権と地方分権，　軍管区制(テマ制)

名古屋大学 文

ビザンツ帝国では，7 世紀以降スラヴ人・ブルガール人やイスラーム教徒などの外敵の侵入に対処するため,帝国をいくつかの軍管区に分け,その司令官に軍事・行政の権限を与える軍管区制がとられた。軍管区では農民に土地を与える代償に兵役義務を課す屯田兵制が行われて大土地所有が抑制され,中央集権化が進んだ。いっぽう同時期の西ヨーロッパでは,フランク王国が分裂し,ノルマン人やイスラーム教徒など外敵の侵入が続くなか,弱者は身近な強者に保護を求めた。そこで領主たちが生命財産を守るため有力者と双務的契約を結び,封建的主従関係が成立した。家臣は主君から封土と保護を受ける代わりに軍役義務を有し,封土で農奴を使役する荘園を経営した。領主が王に対して不輸不入権をもつ,地方分権的で王権の弱い封建社会が成立した。